

聖書：Ⅱペテロ 1：1～3

説教題：いのちと敬虔に関するすべてのこと

日時：2018年1月7日（朝拝）

今日からペテロの手紙第二を見て行きたいと思います。著者は1節にある通り、「イエス・キリストのしもべであり、使徒であるシモン・ペテロ」。ご存知の通り、12弟子の筆頭者。主を3度否んで倒れてしまいましたが、主のとりなしによって立ち直った人です。使徒の働き前半に見る通り、主が天に上られた後、大切な働きをしました。そのペテロはヨハネの福音書の最後に記されているように、殉教を予告されていました。そしてこの手紙の1章14節に記されている通り、どのようにしてかは定かではありませんが、彼は自分の死期が近いことを知っていました。そんな彼が世を去る前に言い残すべきメッセージを記したのがこの第二の手紙です。そういう意味で彼の遺言的書簡と言うことができると思います。

この手紙の宛先はこの書の中に明示されていません。一つの手掛かりは3章1節の言葉です。「愛する人たち。いま私がこの第二の手紙をあなたがたに書き送るのは、云々」。つまりこの手紙の前に、もう一つの手紙を彼は同じ読者に書き送っていたことが分かります。それがペテロの手紙第一なののでしょうか。もしそうだとすれば、この手紙は第一の手紙1章1節にあるように、ポント、ガラテヤ、カパドキヤ、アジア、ビテニヤ地方のクリスチャンたち、すなわち小アジアの中部から北部にかけての教会に宛てて書かれたと考えられます。その人々のことをペテロはここで「私たちの神であり救い主であるイエス・キリストの義によって私たちと同じ尊い信仰を受けた方々」と言います。この手紙の読者には、第一の手紙と同様、異邦人が多く含まれていたと考えられます。そして彼らはこの手紙の執筆年代（ペテロの殉教前、60年代）から考えて、第二世代のクリスチャンたちと言えます。従って彼らはイエス様を肉の目で見たことはありません。そのことは第一の手紙1章8節で「あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどっています。」と言われていたことにも通じます。しかしペテロはその読者たちも、「私たちと同じ尊い信仰を受けた」と言います。ペテロたちが受けた信仰と何ら質的に異ならない。それはイエス・キリストの義によって受けたものです。これは当時の読者たちにとって驚くべきメッセージだったのではないのでしょうか。彼らは時代的にも地理的にも民族的にも、ペテロたち使徒たちとは全く違ったとこ

ろにいます。なのにあの使徒たちが受けた信仰と何ら変わらない信仰を受けている！同じ尊い信仰をいただいている！それは今日の私たちにも当てはまります。2000年前のイエス様を見たことがなく、地理的には東洋の端っこにあり、人種的にも全く異なる私たちが受けたのも、ペテロたちと同じ尊い信仰です。使徒たちが伝える福音を聞いて、そこに差し出されているお方を信じるならそうなのです。私たちもここでペテロが言う「尊い信仰」をいただいている者たちなのです。

さて、ではこの第二の手紙の執筆事情は何だったのでしょうか。それは偽教師が現れ始めていたということでした。2章1節にこうあります。「しかし、イスラエルの中には、にせ預言者も出ました。同じように、あなたがたの中にも、にせ教師が現れるようになります。彼らは、滅びをもたらす異端をひそかに持ち込み、自分たちを買い取ってくださった主を否定するようなことさえして、自分たちの身にすみやかな滅びを招いています。」この偽教師たちに惑わされないように、自分たちが受けた尊い信仰を大事にして、そこに踏みとどまるように！そのように勧めるためにペテロはこの手紙を書いたのです。そんな中、彼が特に強調して語っているメッセージが「知識」の大切さです。そのことがさっそく2節の最初の祈りに現れています。

彼はここで「恵みと平安」を読者たちのために祈っています。第一の手紙もそうでした。またパウロの多くの手紙にもこれが見られます。一つ目の「恵み」は受けるに値しない者に注がれる神の特別の愛顧、祝福のこと。二つ目の「平安」は一つ目の恵みの結果として与えられる神との平和また平安、そしてそこから生じるあらゆる霊的祝福を指します。しかしこの第二の手紙における特徴は、この恵みと平安が読者たちの上に豊かに注がれるための道筋が示されていることです。それは「神と私たちの主イエスを知ることによって」ということです(直訳すれば「神と私たちの主イエスの知識によって」)。ここにこの手紙における「知識」の強調が現れています。この知識とは、聖書全般に見られるように、単なる頭だけの知識のことではありません。聖書が「知る」という言葉を使う時、それは知的に知るだけでなく、人格的な交わりを通して知るという意味を含みます。私たちが誰かを知る時も、この二つのレベルが考えられます。一つは遠巻きに第三者的に情報を集めて、その人を知るといった場合があります。たとえばテレビに出て来る俳優やアナウンサー、スポーツ選手を、私たちはそういう意味で「その人を知っている」と言う場合があります。しかしそれだけでは十分にその人を知っているということにはなりません。やはりその人と実際に会って話をしたり、具体的に何か活動を共に

したり、一緒に時を過ごす経験があると、もっと深い意味でその人を本当に知ることになります。ここで言われている知識とは、そういう人格的な関係、交わりを通して知るといふ側面を含むものです。もちろんこのことは、交わりを通して知るといふ面を強調するあまり、その反対に知的な作業を軽視するというものではありません。いくら関係を通して知ることが大事だと言っても、その相手の人がどういう人かを知的な面からも知ることなしには、相手を真に知ることには至りません。ですから私たちが神を知るにも、神がご自分を啓示された聖書の注意深い学びまた研究は当然必要です。そのことを踏まえて、もう一度2節を見つめたいと思います。ここでペテロが語っている大事なメッセージは何でしょうか。それは恵みと平安を得る道は神と主イエスを知ることとセットだということです。私たちは新しく始まったこの年、自分の生活の上に恵みと平安が益々豊かにされることを願うでしょうか。もちろん願うと思います。であるなら、ただ漠然とそのことを祈るのではなく、まず神と主イエスを益々知ることを求めて行かなければならない。神はどんなお方か。主イエスはどんなお方か。神と主イエスは私たちのために何をしてくださったか。今、何をしてくださっているのか、将来何を用意くださっているのか。そのために私たちにどんな歩みを求めているのか。これらを「知る」こと抜きに、ただ恵みと平安を求めてはダメなのです。ペテロはこの手紙の最後の3章18節でもこう言っています。「私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの恵みと知識において成長しなさい。」彼はここでも「知識」の大切さを強調しています。彼はこのことをこの手紙で訴えたいのです。私たちはそのことをこの手紙の中で学ばされて、恵みと平安をいよいよ豊かにされる信仰生活を導かれないと思うのです。

さて、「知識」の強調は3節にも現れています。そこに「いのちと敬虔に関するすべてのこと」とあります。この「いのちと敬虔」という言葉でクリスチャン生活のエッセンスが表現されています。クリスチャンはイエス・キリストを信じていのちを与えられ、いのちに生きている者です。そのいのちは敬虔で特徴づけられるものです。すなわち神に喜ばれる歩みをするということです。もしかするとただこれを聞くだけでは、私たちにとってプレッシャーになることかもしれません。しかしここにある素晴らしいメッセージはこのことです。私たちがこの「いのちと敬虔」に歩むために必要なすべての力を、主イエスが与えてくださるといふこと。私たちは信仰生活のスタートは神の一方的な恵みによるが、信じた後は自分の力で頑張るって行かなければならないと考えているかもしれませんが、最初の信仰義認はただ神の一方的な恵みによるが、その後の聖化の歩みは、少なくともかなりの部分、自分自身のあり方にかかっていると。そう考えると、敬虔な歩み

という課題は私たちにとって非常な重荷のように思えて来ます。この道を最後まで進んでゴールに達することは私にとってはほとんど不可能なことも思えて来ます。しかしここでそのための力は主が与えてくださると言われています。しかも「すべてのことを」と言われています。そのように導いてくださるイエス様は弱々しい方ではありません。ここに「主イエスの神としての御力は」とあります。イエス様は神様です。その神としての御力を持って、イエス様は私たちがいのちと敬虔に歩むために必要となるすべての力を十二分に与えてくださる。私たちがこの道を進むために必要な力はすべて主イエス様の内にこそあるのです。ですから私たちはこのイエス様にこそより頼み、イエス様からその力をいただいて歩まなければなりません。ここに私たちにとっての大きいなる励ましの真理があるのです。

そのイエス様はさらにここでどのように言われているのでしょうか。ここに「私たちをご自身の栄光と徳によってお召しになった方」とあります。「栄光」とは、旧約聖書で神にこそ使われていた言葉で、非常な輝き、神的な光を意味します。イエス様は神として、その神の栄光を持ちたもうお方です。もう一方の「徳」とは、道徳的な卓越性のこと。これはイエス様が地上に人となって来られて歩み通された道徳的に完全なご生涯、義のご生涯のことでしょう。この栄光と徳によってイエス様は私たちを召してくださいました。すなわち救いへ召してくださいました。通常、救いへの召しは父なる神のわざとして聖書で語られていますが、ここではイエス様のわざとして語られています。「召し」について大事なことは、これは単なる「招き」とは違うことです。招きは断ること、拒否することができます。しかし召しは違います。召しは神の一方的な働きであり、必ず目的を成し遂げる力を持ちます。それは無効になることがなく、必ず結果を生み出すものです。ですから私たちは自分の信仰について、このように考えなくてはなりません。自分が今こうしてイエス様への信仰に歩んでいるのはなぜなのか。それは神が私を召してくださいましたから。力強い御手を持って、グイッとそちらに引き寄せてくださったから。ここではその神の働きにイエス様が関わっていたということが語られています。そのようにイエス様が私を救いへ召してくださいましたなら、このお方の恵みと力により、私の救いは必ず最後まで行く。このように私を導いてくださったイエス様を益々知ることを通して、すなわちこのイエス様について学び、イエス様に信頼し、イエス様と交わることを通して、いのちと敬虔に歩むためのすべての力は私たちに与えられるということです。

ですからこの3節をもう一度まとめると、こういうことになります。私たちは尊い信

仰をいただいて、その歩みをスタートさせていますが、後は自分の力で頑張るようと、私たちに任された状態にあるのではない。神であるイエス様は人となって私たちの救いのために完全な歩みをされました。その神としての栄光と人としての徳とによって私たちを救いへ召してくださいました。その方は私たちを救いの最終状態まで導く完全な力を持っておられます。私たちがいのちと敬虔の道のりを最後まで踏み進むための十分な恵みを持っておられます。私たちは信仰に入った時、イエス様を知り、その恵みの力に生かされ始めて今日まで歩んで来ましたが、この方を益々知ることを通して、これからも一層この「いのちと敬虔」の道を前進して行くことができるのだということです。

2018年の歩みがスタートしました。私たちはこの年、どうやって歩もうとしているでしょうか。私たちはこの新年、何か新しい志を立てているかもしれません。信仰生活においても今年こそ！と心に抱いている思いがあるかもしれません。しかし単なる人間的な決心や決意は、そう長くは続かないものです。やがて息切れし、頓挫してしまいやすいものです。しかしここに素晴らしいメッセージがあります。私たちがいのちと敬虔に歩むためのすべての力を私たちに供給し、注いでくださっているお方がおられます。私たちは自分の力で重い腰を上げながら、何とかこの年を歩むのではない。私たちに力がありませんが、イエス様は神としての御力を持って、私たちに必要な力をすべて与えてくださいます。そして4節で語られるように、私たちの歩みの先には「神のご性質にあずかる者となる」という、信じられないようなゴールが備えられているのです。その道を進むためのカギは、益々主を知る道に行くことです。みことばを通してイエス様をさらに知り、そのイエス様に信頼し、そのイエス様との交わりの内に歩むことです。私たちはこの手紙を読み進みつつ、ペテロが語る通り、主を知る恵みと知識とにおいて成長させられたいと思います。そしていのちと敬虔の歩みのために必要なすべての力と恵みをこの方からいただいて、栄光のゴールへと至る救いの道を、この年も主を喜びつつ前進してまいりたいと思うのです。